

特 259
187

菅原時保禪師

碧巖錄講演 (其一)



始



特259
187



臨濟宗
建長寺派
管長

碧

菅原時保禪師

巖

錄

講

演

(其一)



序 文

最近の世相を観まするに、世人多く物質偏重より來る行詰まりに焦燥を感じ、安住の地を得られずして喘いでゐる様に思はれます。元來人間の愉樂は物的、心的兩方面が充足せられてこそ全きを得るので、心的方面が閑却せられ、心の歸趨する所を失つては砂上樓閣の如き不安な人生を送らねばなりません。各人の心を取り出して、つと見つめて反省を重ね、安住の彼岸を求めて錬磨するてふことは由來東洋文化の精粹であつたのですが、段々怠られ勝ちになつて來た様であります。

従つて當合名考查課と致しましても、物的福利施設の充實に心がけるのみでは不十分と考へ、お互が靜かに心的考察の出来る精神修養の機會を持ち度いと思ひまして、今回鎌倉建長寺派管長菅原時保禪師に御願ひ申しました處、早速御承諾下され、碧巖錄を御講話下さることゝなつた次第でございます。

私共は之を機縁としてお互に篤と心の問題を考察檢討し、精神修養に勵み度いと存じます。

昭和十一年十一月

編者識

碧巖錄講演の前提

(一)

三井に御勤務なさる、お方は何れも修養に御熱心と見えまして、私如き愚拙、極まる者の講演にすら如是聽講者の多いには敬伏致しました。此大多の人様をお入れ申すには、此講堂では少々無理であります。椅子に腰を掛けてをらるゝ人もあります。が、立つてをらるゝ人の方が多い様であります。故に、私も諸君に順應して半は立ち、半は椅子に腰を掛けて話をさせて頂きませう。

古聖人の云はれました言葉に「君子は聖徳あつて、容貌愚なる、

が如し」とあります。此言葉の半分は能く私に適當して居ります。——申す迄もなく君子の聖徳は、私に取つては無論ゼロであります。されど、私の姿は頗る愚人然としてをりますと共に實際の愚人であります。——古語に、「麒麟も老ゆれば、驚馬に等し」とあります。元來私は驚馬であります、其驚馬が次第に年をこり只今は徹底的の老驚馬になりました。其老驚馬が無遠慮に諸君の面前に馬面を突き出しましたから、定めて諸君は驚愕なされたことでありませう。斯く申す私も實は恐入つた次第であります。此恐入る次第になりました其次第は、只今紹介くたされました佐々木様の御申しつけ則ち御依頼であります。因つ

て止むことを得ず茲に登壇致しましたのでありますから、賢明なる諸君、私の苦しい胸中をお察しく下さい。

私の申し上げます話は虫糞だらけの古物、随がつて興味も極めて淺薄であります。然るに幸のここに、お聞きくださる諸君が、何れも聽講術に長じてをられますから、つまらぬ私の話を有益にお聞きくださることに、私は深く信じ大安心して話をさして頂くことが出来ます。それが何よりうれしう御座ります。

——今日は諸君のお手許に差上げてあります碧巖録その提唱は暫時おあづかり、——諸君に對し甚だ失敬でありますが碧巖録聽講の豫備知識を少し話さして頂きます。故にお手許にあります

本はお仕舞ひください。そのかはりとして私に諸君のお大切に
してをらるゝ心のお耳をお貸し下さい。

私如きものでも一度は若い時がありました。其若い時、私も
人様なみに血氣に走り、聖人の格言、——君子の教訓、——又
は學士博士の講演、——有名の雜誌、——新刊本、——それ等
を聽いたり見たり讀んだりして、それを憶面もなく我がもの顔
で公衆面前で堂々辯じたものであります。今憶ひまするご如何
にも不道德千萬のここを致しました。所謂、人様のへド、粕を私
がなめて、私がなめた其へド、粕を又人様に差上げたのでありま
すから、大なる失禮であります。故に今尙心中に於て常に慚愧

して居ります。

七十歳の今日は人様のへド、粕を私がなめて、其なめたへド、粕
を又人様に差上げるご云ふ様な、ヤ、ボ、臭いごは一切廢業致し
ました。——此頃は私も老後の樂みに、或意味の郵便配達ご牛
乳配達を兼業して居ります。故に今日も諸君のお手許へ郵便物
を配達致したり牛乳を傳達致します。配達致しました郵便物の
是非、——傳達致しました牛乳の良否、——諸君、各自御自身で能
く見分け、能く味うて頂きたいのであります。

苟もご申し上げては失敬でありますが、苟も私が配達致しま
する郵便物及び牛乳は、頗る上等にして無類一品でありますか

ら、大安心してお受取りくださる様に折入つてお願申し上げてをきます。

諸君御承知の如く、一口に宗教と申しますが、宗教そのものは無量無数であります。その無量無数を大別しますると僅かに三つになります。曰く一、神教、——曰く多神教、——曰く唯心教、——耶蘇教の如きは、獨りの全智全能の神様があつて天地は無論のこご一切の萬物をお造りなされたご申しますから是は一神教。(委細の義は耶蘇教のお方に問うてください。)

日本の神道の如きは、昔より八百萬神と申して居りますから、是は一神教ではありません多神教であります。近來は新たに乃

木大將、——東郷元師、——様が八百萬神のおなかま入りをなされましたから益々多神教であります。(是又委細の事は神道のお人にお尋ねください。)

印度より到來致しました佛教の如きは唯心教であります。耶蘇教の如く一神を立て、それに一切をお任せするでなく、神道の如く八百萬神を立て、それに一々心願を捧ぐるでなし、唯心を以て萬事萬法、一切の總てを自由自在に取りあつかふのであります。

佛教は、現在十三宗五十何派に分れて居りますが、要するに唯心の外はありません。云ひ換へますれば心を土臺として、正

道門、——浄土門、——自力、——他力、——種々様々々春蘭秋菊の芳香を放つてをるもの、畢竟するに心外無法たることは、同一不二であります。

以上數へ上げました、一神教、多神教、唯心教、此三が元で現今無量無數に宗教が分れてをるのであります。——改めて諸君にお尋ね致します。一神教、多神教、唯心教、此三教の中、信仰することならば何れの教をお取りになります。一神教か、——多神教か、——將又唯心教か、——一神教必ずしも悪しからず、多神教固より好し。私は一神教を敢て嫌ひません。多神教も寧ろ邪魔に致しません。されど、私の立場が唯心教であります故

に唯心を主とする佛教を信仰して居ります。それが本業本職であります。私が信仰して居りますから、諸君にも是非佛教を信仰なさいとお勧めする次第ではありません。

佛教ご云ふ一つの宗教そのものを信仰すること否とは別問題として、諸君お互が心ある以上は、心そのものをして眞箇に安心立命の出来る宗教であるならば、神道であらうご耶蘇教であらうご、又は名もなき宗教であらうご決して不都合はありますまい。今日より以後の事は知りませんが目下の處、佛教中の禪宗、所謂佛心宗たる禪宗が、心をして眞に安心せしめ且つ立命せしむるには、天下に比類なき宗教であります。(或は手前味噌かも

知れません。その比類なき佛心宗に藉を措きます私が、諸君の心をして安心立命せしむるに尤も直接且つ適當なる、聖賢の郵便物と、佛祖の牛乳を配達致すのであります。故に何宗何派、——何教何社、——信不信、——仰不仰を論ぜず苟も安心立命しようご欲望なざる心を御所持のお方は能く心の耳を開き心の腹を虚にして、是より私の配達致します郵便物と牛乳を能く聴き取り能く味うてください。——

心は一身の主にして萬事の元、一心なければ萬藝ありと雖ごも總てが夢、——一切が幻であります。一身の主たる其心、萬事萬法の元たる其心、千藝萬藝の大王たる其心をお互が所持

いて居るのであります。諸君聴きたまへ。

天下の色は、舉げて見盡すべからず。然れども其元は唯だ五つ、曰く青、黄、赤、白、黒、それであります。總ての色ご云ふ色は、青、黄、赤、白、黒の集散離合、その變化であります。

天下の聲は、舉げて聞くべからず。然れども其元は唯だ五つ、曰く宮、商、角、徵、羽、それであります。一切の聲ご云ふ聲は、宮、商、角、徵、羽の長短輕重、清濁高低、その權化であります。

天下の味は、舉げて嘗むべからず。然れども其元は唯だ五つ、曰く辛、酸、苦、甘、鹽、それであります。日本料理、——支那料理、——西洋料理、——凡そ味ご云ふ味は、辛、酸、苦、甘、鹽、その使

用如何に依るのであります。

天下の事は、舉げて知り盡すべからず。然れども其元は唯だ一つ、曰く唯心、之是の唯心、「是を放てば六合にわたり是を捲けば密に藏る。」——「大は方處を絶し細は無間に入る。」天下の色も、天下の聲も、天下の味も心がなければ、色も聲も味もありません。——

不思議中の不思議なるものは心、——

如何にしても離るゝここの出来ぬものは心、——

必要中の大々の必要なるものは心、——

是非ともなくてならぬものは心、——

如何に使用しても、使用しきれぬものは心、——

果して然るや否や、其事實——其實際は、諸君御所持の心に相談して御覽なさい。——諸君本具の心に質問して御覽ください。——

御承知の如く、現代は心理學と云ふ學問上で、心の研究は疎に入り細に入り實に至れり盡せりであります。故に私如き耄碌が彼れ是れ申す必要はありません。されどされどであります。昔し道林禪師が白樂天に向つて云はれし如く、三歳の童子も能く云ひ得ると雖ども八十の老人も能く行ひ難しで、心のことはかりは講釋や説明で梟がつくものではありません。實地につき

大なり小なり修養しなければ決して眞箇の安心立命は出来ません。

釋迦如來が雪山十二年の苦行も、達磨大師が九年面壁も、其他番々出世の高僧知識方の千辛萬苦、何れも實地につき安心立命の修行であります。疊の上の水練や、机の上の講釋は、愈々云ふ場合には百害あつて一益なしであります。他の事は如何が存じませんが心のことは實地に修行しなければ始めより研究をしない方が寧ろましである。(甲斐國惠林寺の快川禪師が、三門樓上火定三昧の如き、相模國最上寺開山の姉上が三門前に於て火定三昧の如き)何れも實地の修行なされし其結果であります。

ます。

私に忌憚なく云はしてくだされば、私は云ひます。苟も人たるものは、衣食住も先決問題であるが、眞の先決問題は、心の研究である。否、心の修養修行であります。不幸にして心の修養なきお人は、衣食住が豊であればあるほど、又不豊であればあるほど、勝手我儘、暴に流れ亂に走ります。——幸に心の修養ありしお人は、衣食住が豊であればあるほど、又不豊であればあるほど、禮に隨がひ義に進み、仁を樂しみ徳に遊びます。

——故に心の修養は是非ともなさざるべからず。必ず誓つてなすべきであります。

諸君は多くの人の捨てて顧みざる心の修養に、お氣がつかれたのは、千歳の一遇であります。此好機を潮に一步一步安心立命の極樂世界にお進みなさい。お近かつきなさい。

有物先天地 無形元寂寥 能爲萬象主 逐四時不凋 是
はお互所持の心、そのものを吟じたのであります。物あり天地に先だつ、その天地に先だつものは心より外に何物もありません。その天地に先だつ物、由來無形にして寂寥であります。

寂寥であるが故に、——無形であるが故に、——能く形を現じ能く萬事に應じ而して一切萬般の主人公となり而して春夏秋冬を通じて其色香を變ぜざる處に心の心たる眞の面目

が靈動して居るのであります。諸君の心、果して然るや。——

「若人欲了知 三世一切佛 應觀法界性 一切唯心造」

是又お互所持の心、そのもの、活動振りを賛賞したのであります。三世一切の佛は無論のこと、三千大千世界の總て、畢竟何ものが製造せしかご研究し來れば、一切唯心造でお互の心、そのものが製造したのであります。

「迷故三界城 —— 悟故十方空」

「夢裡明々有六趣 覺後空々無大千」

三界城も十方空も、お互の心から、——苦も樂も生も死も、お互の心から、——お互の心が六道を輪廻し、お互の心が四

聖に遊化す。」——或論には、「心生ずれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す。」とあります。盡乾坤、——全宇宙、——三世十方、——即心である。即心が三世十方、——全宇宙、——盡乾坤である。迷うて蛇ごなる女もあれば、悟つて上人ごなりし男もある。佛になるも鬼になるも、山ごなるも川ごなるも、芳名を千古に残すも、悪名を萬代に晒すも、總て是、心そのもの、變化、幻影、反響であります。否、否、反響でなし幻影でなし變化でなし、心そのまゝ、心それごとくであります。」

私の宗派では、參禪問法の修行僧に向つて、最第一に兜率三關を研究させます。今日は時間の餘分がありませんから、三關

の文面だけ朗讀して譯明は他日に譲ります。曰く

兜率悅禪師設三關問學者

撥草參玄只圖見性即今上人性在甚處

識得自性方脫生死眼光落時作麼生脫

脫得生死便知去處四大分離向甚處去

以上、——直指人心、見性成佛を以て表看板とする禪宗でありますから、只今朗讀致しました三關を研究することは尋常の茶飯であります。

始めての講演に勝手氣儘のここのみを申し上げまして諸君に大なる御迷惑をかけました。なんごも恐れ入る次第であります

す。まだ少々時間がありますから心の修養に参考になる古人の話をお耳に入れて、此の壇を下ることに致します。

昔し支那に元曉と云ふ僧侶があつて、或夏のころ單獨で知らぬ地方を無暗み矢たらに旅行してをりますうちに、いつしか日も西山に傾き、遠寺の鐘がボーンと暮れ六つを報じましたが、宿泊すべき家が見當りません。もう少しいつたら家があるだろう、と熱さをこらへ、つかれた足を曳づり曳づり行くうちに日は全然暮れてしまひ、所謂進退谷る、と云ふ窮地に落入り如何ともなす能はずと云ふ有様、ふと路傍を見ますると一軒の破堂があります。是ぞ天の與へ究竟の宿泊所なりと大歡喜して一夜

の宿を願ふと云うても答ふる人のなきを幸に、土足のまゝ、堂の内に入り柱にもたれて先づ一睡、——目を覺すとまだ夜半、如何にも咽が乾いてたまらない。嗚呼水がほしい。——されど始めて來た處ではあり且つ夜半のころであるから、井戸が何邊にあるやら、サツ、バリ、方角が立ちません。けれど咽は益々かはく、——兎に角、堂のまはりの、ごここにか少々位の水はあるだらう、と憶斷して堂外へ出て見ました。幸に月夜、一月普現一切水、一切水月接一月、と云ふ証道歌を吟じつゝ、旅の勞を忘れ堂後の墓地に至りますと、不思議不思議石器に淨水満々、それに一天雲なく清風匝地、——隨喜渴仰と云ふ語は此時の

標語かと思ひながら、委細かまはず、手を以て掬しては飲み、——
 掬しては飲み、——充分渴を醫して再び堂内の柱にもたれ更
 に一睡、——起き来れば紅日三竿、昨夜掬し飲みたる水の味
 ひ、忘れんごして忘るゝ能はず、今朝もご睡餘の目を、こすり
 こすり昨夜頂戴した浄水のありし處は、たしか此邊でありしご
 注意に注意して見廻しました。果して石器がありました。見る
 ご浄水どころか二度ご見たら目が病氣になりさうな汚水、——是
 ではない。昨夜の水は浄水で、しかも満々ご湛へてをつた。は
 て不思議なこともあればあるもの、ご心に思ひ東に西に前に後
 に、念に念を入れ尋ねましたが、水のあるのは只今見て来たそ

れより外に水らしき者は更に見當りません。さすれば昨夜、咽
 の乾いた爲に浄水なりご信じ満飲したのは、あの石器の水であ
 ったか、——歩を廻らし先に見し石器の處に来て能く見る
 ご、石器ご見しは石器に非ず死人の髑髏、——それに雨水がた
 まり、それが腐敗して中に棒振り虫が浮いたり、沈んだりして居
 ります。——それを一見するや、忽ち吐瀉、——元曉、茲
 に於て大悟徹底。——

如何にも、心生ずれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅
 す、であります。心次第で腐敗の水も浄水ごなり、心次第で良
 薬も狼毒ごなります。一切唯心造ご云ふ語は我を欺むかざる格

言であり、又眞理であります。物には本末があり、事には始終があります。其本末を、あやまたず、其始終を、みださざる、それが人間の人間たる面目にして、人間の人間たる本業であります。その本末の本とは何に乎。——その始終の始めとは何に乎。——云ふまでもなく、心が本で心が始めであります。本正しからざれば末も又正しからず、始め明らかならざれば終も又明らかならず。」明らかになせよ、正しうせよ、明らかにすべきは心なり、正しうすべきは心なり。嗚呼心なるかな心、心、こゝにあらざれば見れども見えず聽けども聞えず。——

「三界唯心 萬法唯識」

「天地と我と同根 萬物我と同体」

心の外に三界なし、識の外に萬法なし、我の外に天地なし、萬物の外に我なし、修養すべき者は心なり、練磨すべき者は心なり。

釋迦如來は、天上天下唯我獨尊の先達、——達磨大師は、

直指人心、見性成佛の權化、——肇法師は、天地と我と同根、

萬物我と同体の結晶、——諸君お互の心は、釋迦如來の心と

別ならず、——達磨大師の心と不二、——肇法師の心と同

体、——果して然らば、肇法師の如く修養し來らば、此身此ま、肇法師、達磨の如く練磨し去らば、此身此ま、達磨大師、釋迦如來の如く雪辛霜苦を重ねなば、此身此ま、釋迦如來であ

ります。何ぞ云うても成功の元は心の修養、——何ぞ云うても結果の始めは心の練磨、——心の修養を等閑にしては好結果は得られません。心の練磨を度外にしては大成は見られません。

諸君、好結果を願ひませんか、大成功を望みませんか、人間誰か好結果を願はざらん、人間誰か大成功を望まざらん。——大成功を望まば、好結果を願は、萬事を放下し専心一意、心の修養をなすべきであります。

今日は最初の講演でありますから、碧巖録聽講の豫備知識、其参考に、更に古徳の格言を一二添へて置きませう。

「正人説邪法 邪法爲正法 邪人説正法 正法爲邪法」

正邪は彼れに非ず、我にあり、我正しければ一切正し、我邪なれば一切邪なる。

看よ畫人は此世界を一切畫なり、こ

化學者は此世界を一切化學なり、こ

憂る人は此世界を一切憂の種、こ

悦ぶ人は此世界を一切悦の種、こ

宗教家は此世界を一切、因縁和合、こ

禪家者流は此世界を一切、自己法身、又は唯心、こ、——

世界の一切は見る人のものとなり、聞く人のものとなる、——

何が故ぞ、世界の一切は唯心、それである。

「未悟以前善悪 善悪共悪 已悟以後善悪 善悪共善」

例せば、茲に一振りの眞刀がある。劍道の妙に達せざる私如き者が使用すれば寧ろ害あつて益なし。されど劍道の達人が使用すれば寧ろ益あつて害なし。—— 茲に一個の毛筆がある。

書道に熟練せざる私如きが運筆すれば悉く拙に非ざれば劣、—— 然るに書道の大家が執筆すれば、總てが龍となり虎となる。—— 聞く牛の飲水は乳となり、蛇の飲水は毒となる。其人の力にあり、其人の徳にあり、其人の心にあり。——

何事も三日坊主では成功致しません。況や心の修養に於てを

やであります。諸君、苟も心の修養を始めたからは、途中半途で挫折したり横へそれる様なことがあつてはなりません。初發心辯成正覺、と云ふここにあります。初一步が大切、初一步の力で千里の外も萬里の外も、見るここも行くここも出來ます。故に最初の一步に決死的の注意を拂はなければなりません。故に私共は常に四弘願と申して

衆生無邊誓願度 煩惱無盡誓願斷

法門無量誓願覺 佛道無上誓願成」

是に鞭策を加へ、是に拍車をかけ、所謂邁往勇進致します。修養上邁往勇進は、平凡の私共ばかりでなく、大聖人、大善知

識と云はるゝ釋迦如來も達磨大師も今尙ほ修行中であります。況や我等に於てをや邁往せざる可からず勇進せざるべからず。

山に登らば須らく其高きを極むべし。山に登りて其高きを極めざれば山に登らざるに同じ。海に入らば須らく其深きを極むべし。海に入りて其深きを極めざれば海に入らざるに同じ。山の半途や、海の淺瀬で、我は山に登れり、我は海に入りぬ、なぞご大言壯語なさるお方が多くの人の中にはありますが、それは眞箇山に登つたのでなく海に入ったのでなく、徒らに山や海を翫弄したのであります。故に山に笑らはれますぞ、海に怒られますぞ。

悟りの山は世界の一番高い山より更に高い。教への海は世界で一番深い海より更に深い、其深き教への海、其高き悟りの山、それに登りそれに入るには、尋常一様の邁往勇進では到底、其高きを極め、其深きを極むることは出来ません。非常の邁往、非常の勇進がなければ悟りの山、教への海の佳興妙味は夢にだも知ることは出来ぬとしたものであります。

諸君は既に日本人であり、——諸君は既に男子である。——男子であり日本人である以上は、——火を以て焼くとも焼く能はず、水を以て溺らせごも溺らす能はざる確乎不拔の大勇猛大精神を卓立し、苟もなさんごせし事業は必ず貫徹せずんば死

すとも死せず誓ひ、いそがず怠らず心靜かに修行の歩をおはこびなさい。

「怠らず行かば千里の外も見ん

牛のあゆみのよしをそくこも」

(以上昭和十一年二月二十三日講演)

(二)

諸君お早やう、——私、朝は勿論、晝でも又は晩でも、人様に逢ふ毎に必ずお早やう、ご挨拶を致します。——諸君お早やう、——先日は、諸君に對し此講堂で講演をさせて頂きました。始めて、なくとも私の講演は、聞きにくいと云ふ定評があります。その聞きにくいと定評のある、始めての講演、——諸君は、始めての聴講、お互が始めご始めごでありましたから、話しを致しまする私も極めて話しにくく、あり、お聞きくださる諸君も極めてお聞きにくいことでありましたらう。——犬は人

に馴れ、猫は家に馴れると云ひますから、一回より二回、二回より三回と、回を重ねますれば、お互は犬や猫でありませんから、知らず識らずの中に、人にも馴れ家にも馴れますから、随がつて話し致しまする私も話し易くなり、お聞きになります諸君もお聞き易くなりませう。それまではお互に辛抱致しませう。——甚だ勝手なる注文でありますが、講演にさきだつて私の願を是非聞いて頂きたい。——私は天然的大なる聲が、どうしても出来ません、至つて小聲であります。それに御承知の如く、廣い講堂に満員、到底私の小聲で致します話は、諸君のお耳に達しますまいと思ひます。依つて恐れ入りますが、諸

君の御身体はそのまま、其席で、お耳だけ私の口元まで御差出してくださいることを願ひ致します。——私の口元まで、お耳を差出してくださいと申し上げましても、耳ご身体を別々にすることは無論出来ません。故にお耳ご御身体ご其席に御安坐そのまま、でよろしい。要する處は、諸君のお耳に他の雑音を入れず、耳聞三昧で私の話をお聞きごりくださる様に願ふのであります。——更に勝手を申しますれば、「耳聞は心聞のよきに如かず」ごありますから、心の耳で是非聞いて頂きたいのであります。幸に心の耳で、お聞きくだされば、聲の大小、——言葉の善悪、——なぞは一切、到底に止まらずして、話の正味眞味

のみが残る、こごになります。——今日も先回申し上げました如く碧巖録講演の前提、——聽講者の準備、——修養者の基礎工事であります。

先回申し上げました話の終りに、山に登らば須らく其高きを極むべし、海に入らば須らく其深きを極むべし、山に登りて其高きを極めざれば山に登らざるに同じ、海に入りて其深きを極めざれば海に入らざるに同じ、ご申し上げて置きました。亦重ねて禪海、教山につき例の老婆言を弄します。

諸君、苟も禪海に入らば須らく其深きを極めざる可からず。——諸君、教山に登らば須らく其高きを極めざる可からず。

——禪海に入つて其深きを極めざれば始めより禪海に入らざるがましであります。教山に登りて其高きを極めざれば是又始めより教山に登らざるがよしであります。

世間の山、世間の海は、低きより高きほど興味があり、淺きより深きほど佳境があります。然るに禪海、教山は、低き處も、高き處も、淺き處も、深き處も、一律、一處、一眞、一處、一眞で、興味十分、——佳境充實、——故に、一歩、一雖、一足、一雖、一も、輕々に踏過してはなりません。隨處に主なる底の心を以て、油斷なく登り、注意して入るべきであります。

本分底から申しますれば、塵々刹々、是黃金——步々、是道

場——立所皆眞也——咳唾掉臂祖師西來意でありますから、特別に禪海に入らずとも、殊更に教山に登らずとも、空
間そのまゝ、悉く禪海、時間そのまゝ、總て教山であります。——
されど、後學初機の爲めに強ひて禪を世間の海に比し、托げて
教を世間の山に喩へ、それに登りそれに入る、ご申した方が修
養上一種の興味があつて寧ろ入り易く登り易きことであらうご
思ひまして斯く致した次第であります。 古歌に

「分けのぼる麓の道は變れごも

同じ高根の月を見るかな」

例せば、富士登山、甲州の方面から登るも好し、駿河の方面か

ら登るも悪しからず、又は東の方面から登るも、又は西の方面
から登るも、其人其人の都合ご土地の辨理に依るのであります
から、百人は百人、千人は千人、必ず一様ではありません。され
ど、愈々山頂に達し眼光を放つて眞如の明月を大觀するに及んで
は、同一平等であります。——古歌あり右の歌に和して

「分けのぼる麓の道の多ければ

登らぬ先に日は暮れにけり」

道の善悪、——道の高低、——道の遠近、——道の安危などを
撰擇して居る中に日は暮れますぞ、人生五十の命は盡きますぞ。

——思ひたつ、その日が大吉日、萬事を放下して邁往勇進、

教への山に登るべし、登りなさい。 古歌に

「雨あられ雪や氷と隔つれぞ

落れば同じ谷川の水」

例せば、大海游泳、相模灣から游泳なさる元より然るべし、北海灣から游泳なさる敢て不可なし、甲の港から游泳なさるも、乙の港から游泳なさるも、又は丙、又は丁、各々其地理に應じ、氣隨意氣儘に游泳なさる、それは千差萬別である。然れども愈々海中に游泳して炎熱を洗ひ、涼味を掬し、大なる快哉を感ずるに至つては東西、古今、無差別であります。

古歌あり、右の歌に和して

「豆や麥、鹽や糶と隔つれぞ

なるれば同じ樽そこの味噌」

貴となく賤となく同じく枯骨となる、で人間萬事斯の如きであります。餘談は中止。

落れば同じ谷川の水、——同じ高根の月を見るかな、と云ふ意味を主として作られた無門禪師の詩があります。それを紹介して諸君方の修養、その一助に供しませう。

大道無門 千差有路

透得此關 乾坤獨歩

眞理の本体は全宇宙に現存して無缺無餘であります。大道の

面目は盡乾坤に充滿して不出不入であります。然るを此道理、此法義を知らざる人は、眞理に缺餘があり大道に出入がありご自分自身で迷路にさまようてをらるゝは如何にもお氣の毒であります。

御覽なさい。一輪天上の月、一人東に走れば月も亦東に走る、一人西に往けば月も亦西に往く、一人月下に安住すれば月も亦安住する。一輪の月、三箇の人に對して、無缺無餘であります。

御覽なさい。一箇の富士、東京の人は富士は西にありご云ひ、西京の人は富士は東にありご唱ふ、中央の人は富士は中央にありご主張する。一箇富士、三處の人を接して、不出不入であります。

ます。

諸君、月を以て眞理に比し、富士を以て大道に擬し、考一考して御覽なさい。眞理の本体は斯の如き者、大道の面目は恁麼なる者、ご云ふ法義が自ら分明になるであります。

古人は眞理の活動千差にして學者の掌握し難きを、「水上葫蘆按著便轉」ご稱し、大道の靈光萬別にして學者の明得し易からざるを、「日中寶石 色無定形」ご唱へて居らるゝは眞に宜なるかなであります、云ふまでもなきことである。眞理、——大道、——そのものは、無心を以て得べからず、有心を以て得べからず。然るに多くの人は有心に非ざれば無心、

無心に非ざれば有心、有無の二心何れかにて眞理大道を掌握し明得しようと思つて御座る、それは似たることは或は似たり、是なることは未だ是ならずであります。如何となれば、有心は是妄想、無心はは無記、無記と妄想は寧ろ眞理大道の障害物、速に捨つべし、急に拂ふべし。果して然らば如何にせば可ならん。曰く八識田中に一刀を下し絶後蘇生し來らざれば、眞理大道を語るに分なしである。然らば八識田中に一刀を下す其方法は如何、曰く道なき處に道を設けて修養するのであります。左に入門の一端を述べて見ませう。

無門禪師の云はれし如く、大道無門で、大道には由來門はあ

りません。天高くして鳥の飛ぶに任せ、海濶うして魚の躍るに任す。十方壁落なく四面又門なし。左りせんご欲する人は君が左りするにまかし、右せんご欲する人は君が右するにまかす。出づるも入るも、進むも退くも、逆順縦横、——横拈倒用、

——總てが御隨意、御勝手、——之是を千差有路ごも千差有門ごも云へば云はるゝのであります。

門なき處の門、路なき處の路は修養なさるお人が自分自身で開拓なさるのであります。自分自身が門路を開拓して自分自身が出入なされた例の二三を左に舉揚して見ませう。

香巖は擊竹門路より、靈雲は見桃門路より、臨濟は六十棒門

路より、徳山は吹滅燈火門路より、又は鵲噪蛙鳴門路より、鐘聲鼓響門路より、松濤竹波門路より、或は說法教化門路より、飛花落葉門路より、若しくは劍双上門路より、鑊湯爐炭門路より、其他、何門路より、何々門路より、——入路入門不同なりと雖ごも、此關を透得すれば乾坤に獨歩、ご無門禪師が云はれし如く、愈々透得したる其曉は、誰も彼も乾坤獨歩の靈妙不思議の境界に遊戯するここが出来ます。私修養なさるお人の爲めに假りに入門入路を設け、御一覽に供しませう。

左に其略圖を



茲に一言お斷りを添へて置きます。諸君既に御承知の如く、大道の本体、眞理の面目、其ものそれには門戸もなければ道路

も階級もありません。然れども修養の手前、指南番の手元として、門戸なき能はず道路なき能はず、随がつて階級も又必要ではありません。故に無門戸の處に門戸を設け、無道路無階級の處に道路も階級も設けざるを得ずであります。されど修養に對する一時の方便、迷者を教化する暫時の止啼錢でありますから、東門は必ず東門、西門は必ず西門、一指必ず一指、無字は必ず無字、と墨守する勿れであります。老婆禪に落る嫌ひがあるか知れませんか。東西南北の四門、一々分開してお耳に達しませう。東門、とは方位を借りて云うたもの、帝王の門に擬しますること、玄武となり、修行の方面から云へば發心、經意より語れば大圓、

鏡智、——之是門を本來の面目門と命名して措きます。

抑々此東門は支那製であります。作者は惠能大鑑禪師、此人は黃梅弘忍禪師の法を嗣がれたお方、本來の面目と云ふ金言は明上座を濟渡なさる時に初めて唱へられた、それであります。その本來の面目の由來を少々語らしてください。

黃梅弘忍禪師の門下無慮七百人、就中有名なる二僧あり、一を神秀と云ひ、一を明上座と云ふ。然るに弘忍禪師の大法は右の二高僧に傳へられずして却つて横入の惠能大鑑禪師に傳へられました。

惠能大鑑禪師、未だ大鑑禪師とならざる以前、金剛經の應無

所住、而生其心、こ云ふ一句に深く感じ、新州より特に來つて弘忍大滿禪師に參見致しました。滿禪師曰く、汝何處より來る。能曰く嶺南。滿禪師曰く、何物をか求めんご欲す。能曰く作佛を求めて餘物を求めず。滿禪師曰く嶺南の人獺獠(卑賤の稱)、佛性なし、如何でか佛たるを得ん(人を試むる端的の處)。能曰く人に南北ありご雖ごも、佛性豈に南北あらんや、我身獺獠にして禪師ご同じからずご雖ごも、佛性何ぞ禪師ご差別あらん(口を下せば即ち知音)。滿禪師彼れの異人なることを知り、去つて槽廠に入つて米を搗かしました。能、命を守り碓を踏むこと八ヶ月、此間純一無雜に精神の修養三昧。

滿禪師一日、大衆を喚び集め、説て曰く人世生死事大なり。汝等、終日只福田を求めて、生死の苦海を出離するごを願はず。自性若し迷はゞ福何ぞ救ふべけん。汝等去つて各自に知恵を看、自己本心般若の性を取り、各々一偈を作り來つて吾に示せ、若し法に於て大意を得たる者あらば、衣鉢を付して第六代の祖ごなすべし、ご告げられました。

大衆退き、互に相語つて曰く、我等心を澄し意を用ひて偈を作るごも、何の益かあらん。神秀上座現に教授師たり、必ず彼の得る所ならん、ご云うて敢て心を用ゆる者がなかりし。故に神秀、前後四日を経て、漸く一偈を壁間に書寫しました。其偈

に曰く

身、是、菩提、樹、心如、明、鏡、臺、時々、勤、拂、拭、勿、使、惹、塵、埃、

滿禪師經行の因、一見して是神秀の述作なることを看破し、陽に賛賞して曰く、後代の人此偈に依り修行し去らば亦以て勝果を得べし、と大衆此の偈に向つて炷香禮敬して善哉と歎美せり。

而して兩日の後、惠能、一童子の碓坊に來り神秀の偈を唱誦しつゝあるを聞き、思惟すらく此偈未だ本性を徹見せざるもの也、と直覺し覺えず彼が未徹在なることを口外せし、時に衆中の一人呵して曰く庸流何を知る、叨りに狂言を發する勿れ。能曰く、若し君、我言を信ぜずんば、試みに一偈を以て是に和

すべし。其人信ぜず只笑ふのみ。夜に入り能自ら燭を秉り、童子をして神秀の偈下に書せしむ。其偈に曰く

菩提、本、非、樹、明、鏡、亦、非、臺、本、來、無、一、物、何、處、惹、塵、埃、

滿禪師一見驚歎し、心竊に能の作なることを知れり。されど陽に貶して曰く、是誰が作ぞ、未だ見性せずと云うて、鞋を將て偈を擦消し去りぬ。

大衆恁麼の語を聞いて、更に顧みるものなし。其夜三鼓、滿禪師、惠能を呼び、能の爲めに金剛經を説き應無所住而生其心、と云ふ處に至つて、能言下に大悟し、一切の萬法は自性を離れざることを徹底せり。依て滿禪師に啓して曰く

何ぞ期せん自性本自ら清淨ならんこは、
 何ぞ期せん自性本不生滅ならんこは、
 何ぞ期せん自性本自ら具足ならんこは、
 何ぞ期せん自性本動搖無からんこは、
 何ぞ期せん自性本能く萬法を生ぜんこは、

滿禪師、能が本性を悟りしを知り、衲今、法寶及び衣鉢を汝に付與す、善く自ら護持し廣く有情を度し、將來に流布して誓つて斷絶せしむること勿れ。惠能を以て第六代の祖とせられました。傳法の偈に曰く

有情來下種 因地果還生 無情既無種 無性亦無生

惠能衣鉢を受け、去るに臨んで禪師に啓して曰く、何の處に向つて去るべき。滿禪師曰く、懷に逢はゞ止まれ、會に遇はゞ藏れよ。(懷會は二縣の名)。能去つて大庾嶺に至りし頃、舊參の二高僧始め七百の雲水僧、能が衣鉢を授受し去るを知り遺憾奮慨措く能はず、衆議一決、一方は神秀を大將となし、一方は明上座を先達となし、惠能が所持して去りし其衣鉢を奪ひ取らんものご各々目ざす方面に向つて邁往勇進致しました。——不幸なるかな惠能は終に明上座の爲に足跡を覺知せらる(明上座は軍人の古手にして身の丈拔群、特に大力無雙、故に七百僧中第一の傑物と常に賞賛せらる)。惠能、明上座等が追跡し來るを知

り、所持の衣鉢を宛も臭破襪を捨つるが如くに路傍の石上に抛置し、身を引いて藪中に潜伏しました。(千金の子は盜賊のために身を捨てず、君子危きに近よらず。)明上座、石上安置の衣鉢を一目するや欣然跳つて雙手を以て持し去らんごなせし。——然るに不思議なるかな、衣鉢の重きこゝ山より重し。(是は如何なる仔細ぞ、諸君一考再考すべき肝心の要處であります。)明上座豫て自慢の力を全身より振ひ出し一舉に舉げんごせしに、根ある泰山の如く寸毫だも動かす能はず。茲に於て明上座、始めて自省、大法は腕力を以て如何ごもなすべき者に非ず、(明上座は肉体上の力は衆に超出するご雖ごも精神上の力に至つては

極めて微力、況や傳法衣鉢を掌握する力に於てをやであります)ご感得し慚愧ご悔悟の涙を心中より流しつゝ、左右を顧視しまするご、惠能が藪裡に潜伏してをらるゝを發見し、欣喜雀躍、萬事を忘れ専心誠意、惠能を請し、其膝下に三拜九拜しつゝ、飲んで前非を謝罪し、涕淚悲泣申して曰く、我が來るは元より衣鉢の爲に非ず、願はくば我が爲に迷雲を一掃し我をして大悟一番せしめよ。時に惠能、驚き怪しみつゝ、藪中より出で明上座に向つて曰く、上座眞に然るや。明上座平身低頭して曰く眞に然り、眞に然り。——惠能曰く、果して然らば汝が爲に説かん。惠能威儀を正し大聲に唱へて曰く、不思善、不思惡、正當恁麼時、那箇是

明上座父母未生以前自己本來の面目、ご明上座恁麼の語を心聞して直下に自己本來の面目を徹見し、永劫積重せし迷雲を掃一掃し盡せり。

以上の本來の面目を以て東方の門ご假定したのであります。諸君にして此門より入らんご欲しつゝあらば、之是本來の面目を公案ごして一意専心に進み進み更に更に進んで中止せざれば必ず大悟徹底するところあるべし。

一休禪師曰く

「本來の面目坊のたちすがた

一目見しより戀ごなりぬる」

異性に向つて戀をするより、お互が本來の面目に戀する、それが極めて安全にして又極めて有益であります。聞く戀には上下の差別なし、ご然らば是ご思ふ、それに對して無茶苦茶に、一推し二推し三推し四推し、推し推し、推し去り推し來れば少々位、否、大々的なる無理なる戀でも必ず成就する必ず成功する。深草の少將も九十九夜で、へこたれずに推し透しさへすれば必ず好結果を得たに相違ない。残念なるは九仞の功一夜に欠くだ。

悟も亦復然り。悟りに上下、古今の差別なし。熱心が第一の養素、熱心に進むべし、熱心に修すべし。熱心熱心、嗚呼、熱心なるかな熱心、熱心の外なものもなし。蓋し熱心は萬事

成功の元なり。今日、是で終了。

(以上昭和十一年三月二十八日講演)

昭和十一年十一月十五日印刷
昭和十一年十一月二十五日發行

發行者兼 印刷者 佐々木四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所 東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社 考査課

終

